



第9回

共感を呼んだ応募作品たち 10回を迎えた「夢アイデア」提案

平成24（2012）年12月

建設コンサルタンツ協会九州支部が進めている一般からの「夢・アイデア」募集事業が今年で10年を迎えた。その記念集会ともいえる「交流会」が平成24年12月1日、福岡市内で開かれた。10年間で応募した総数は511件にも上り、年々、応募作品の質も上がり、今回も審査員をうならせ、優秀作品の選出に頭を悩ませた応募作品が勢ぞろいした。

最終選考に至るまで、事前審査が重ねられただけに、プレゼンテーションの機会を勝ち取った7作品は、発案者の「暮らし」や「地域社会」に係る生活や生き方に根差した発想から生まれた「夢とアイデア」ばかり。建設コンサルタンツ協会という専門家集団が「一般市民」発想を刺激し、耳を傾け、同時に何かを得ようとする事業の意図は十分に実現していると言えよう。

応募作品を見て、まず伝わってきたものはそれぞれの「暮らしの夢アイデア」に込められた「切実感」であった。すでに経済大国となり、どこの国よりも社会資本が充実して、逆に「コンクリートから人へ」が政治的キャッチフレーズにまでなっている。にもかかわらず「生活の視点」から見直すと、そこに現れてくるものは、今暮らしている社会が「もっと、こうあってほしい」という溢れるほどの切実な願いの数々であった。それを、ただ願いや批判だけに終わらせず、一歩進めて「私だったらこうする」「こう変えたらどうだろう」と夢とアイデアを創り、提案することに、この事業の今日的意味の大きさが感じられる。

それを象徴するような提案作品「ママだって〇〇したい！」が最優秀賞に選ばれた。一人のシングルマザーが友人と語り合い、子育てに追われる母親の目線から、図書館や映画館の在り方、資格講座の新設まで「切実な」夢とアイデアをまとめたものだ。巨額の公共投資が必要なわけでもない。社会のシステムをほんの少し変えて、子育ての母親の立場に立って「子連れの時間、日」を新設してほしい、身近な、ただそれだけの願いを提案にまとめたものだったが、交流会参加者の投票でも圧倒的な支持を得た、文句なし最優秀賞であった。

それにしても、素晴らしい「プレゼンテーション力」だった。ある審査委員は、どのようにすぐれた事柄も立派な施設も、情報発信力がなければ、その価値は伝わらないと講評された。情報化社会では、発信力がなければ「無に等しい」と言われるが、まして「夢アイデア」の提案におけるプレゼンテーション、つまり「共感を勝ち取る

力量」は作品評価の大きなポイントになることを示した。聞いてみると、「発表前、家族を聴衆として幾度も練習しました」。はっきりとプレゼンテーションの重要性を認識されていたのである。

続く優秀作品2点はいずれも学生の「夢アイデア」だったが、そのプレゼンテーションも際立っていた。九州大学工学部建築学科の二人の女子学生の提案「育つ森・学生が作る街」は新しく建設が進む九大キャンパスに通う学生の「暮らしと学び」の実感―「都心部から遠く交通が不便」「周りに店がない」「誰かと教え合いながら勉強したい」など、これもまた学生生活の、日常的で切実な願いから生まれた提案だった。

キャンパスまでバスで20分、その起点である地下鉄・学研都市前駅に「お金がなくとも立ち寄れる学生の居場所」を創ろうという提案であった。自習室、談話室、資料室、シャワールームなどの部屋のユニットをずらしながら重ね、テラスには緑を植え「未来と重ねて、育つ森」と名付けた。一時、郊外に脱出した京都や東京の大学キャンパスの都心回帰が進んでいるが、この提案は「街なかに学生が集える場」を創ろうというものだ。九大・伊都新キャンパスは高層ビル群と豊かな自然、歴史遺産で構成され数々の賞を得ているが、学生の日々の暮らしの視点からのキャンパスづくりが充分かどうか、鋭く問いかけているようにも思えた。熊本大学学生の放置自転車活用の提案も、身近な事柄への問題意識から発想して、都市的活用にまで発展させようという提案であり、細かなバックデータをそろえて説得力があった。

10年という節目での「夢・アイデア事業」はこうして、若い世代の発想と発信力が高く評価される結果となった。同時に、身近だが、切実な願いから出発した「夢アイデア」提案は、巨大な社会システムから見れば、あるいはささやかな変革の提案かもしれない。しかし、いずれの提案も現在の日本社会の在り様の、痛部を鋭く突いていた。「真実は細部に存在する」という言葉が新鮮によみがえった夢・アイデア交流会の時間であった。

(了)

玉川 孝道 (西日本新聞元副社長)

夢アイデア審査委員長 (平成22年～令和2年)